

定家「もとの姿」の基本性の意味

——初心性と究竟性——

佐藤茂樹

『吾妻問答』においては、「稽古に初・中・後侍る由承り候。いか様の事に候哉」という質問に対して、「稽古の初・中・後と申す事、書き置きたるなど見及ばず候」と記されているが、『毎月抄』では、次のように記す。

いま一兩年ばかりも、せめてもとの体をはたらかさで、御詠作あるべく候。

もとの姿と申し候は、勘申し候し十体の中の幽玄様、事可然様、麗様、有心体、これらの四にて候べし。此体どもの中にもふるめかしき歌どもはまゝ、見え候へども、それは古体ながらも苦しからぬ姿にて候。たゞすなほにやさしき姿をまづ自在にあそばししたゝめて後は、長高様、見様、面白様、有一節様、濃様などやうの体は、いとやすき事にて候。鬼拉体ぞたやすくまな

びおほせがたう候なる。それも練磨の後は、などかよまれ侍らざらむ。かやうに申せばとて拉鬼体が歌の勝体にてあるには候まじ。さるから初心の時はよみがたき姿にて侍るなるべし。

初心段階の風体として、「もとの姿」四体を詠むことを薦めている。それは、「この四体はすなおに優しいという点で共通しているので、特に基本となる風体として取り上げたのである⁽¹⁾」と考えられている。但し、こうした考え方に對して、手崎政男氏は新しい見解を示された。『毎月抄』の「歌は和国の風にて侍るうへは、先哲のくれぐれ書おける物にも、やさしく物あはれによむべき事とぞみえ侍るめる。げにいかにおそろしき物なれども、歌によみつれば、優にき、なさるゝ、たぐひぞ侍る」を「留意する必要がある

る」として、

「やさしき姿」は、歌の入門であるとともに、それはまた、練磨の後においても、なお常に念頭におくべきものという意味での、和歌の基本的・必須の性格として、いることが知られる。だからこそ、それが入門から心がけることを忘れてはならないものともなるのである。ただし、「やさしき姿」は、「十体」のいずれにあるたと言ふよりは、歌体分類に先行する前提条件的なものとして解すべきであろう。『毎月抄』が、初心段階から直ちに特殊な歌体を、と志向する心を抑え、ましてや、「もとの姿」を、とはやろうとすることをいまして、まず、「すなはにやさしき姿」を心がけることを説く所以でもある。

と考察された。⁽²⁾その根底には、「はたらかさで」は、「やめないで」「動かさないで」「変えないで」という意味⁽³⁾ではなく、「はたらく」「はたらかす」の用例を考察された上での「はたらかさで」は、はたらかそうとする一つの意思に対して、それを制止しようとする別の意思がさらに加わって抑える関係にあることを意味する（前掲書二六五頁）ということと、「もとの姿」の「もと」とは、歌論書における用例を探られて、「初歩・基礎または低次の意ではなく、

むしろ最重要・不可欠または高次の意とすべき」（前掲書二六六頁）ということ根拠とされている。

確かに、従来の「はたらかさで」の意味は、意識的過ぎると思われる。しかし、『毎月抄』を素直に読む限り、「もとの姿」は初心者がまず第一に学ぶべき体と位置づけていることは疑えないと思われる。そこで、本稿では、歌論書連歌論書では初心者に何を伝えているのか、そしてそれは、芸道論として、何を目指したもののかを考え、「もとの姿」の基本的な意味を考えたい。

一

初心者に対する教⁽⁴⁾えを、歌論書、連歌論書では次のように説明している。

(1) 劫初はげに自然の道理にまかせてつくろはずして、おのれが自性に、いづれの事もまかせけるとかや

（『桐火桶』）

(2) 初心の人、ことに優しくおだやかに、具足すくなくするくとしたる句を思ふところなく口軽く付くべし

（『連理秘抄』）

(3) 初心の程、あながちに思案すべからず。初一念といふがごとく、思ひ寄るところを、とかく案じ乱す事な

くて、やがて出だすべし

(『連理秘抄』)

- (4) 初心の人おほくは連歌のつまり侍る也。かまへて初学にはうき／＼と句ばやに、ちとどこともなきやうなる事を散々にして、上手にまじりて、次第に詞をもみがき風情をもめぐらしはべるべき事也

(『筑波問答』)

- (5) 初心のほど、ゆめ／＼万葉以下の古き事を好み給ふべからず。たゞあさ／＼としたる句のやす／＼としたるを、詞優しく句がるにし給ふべきなり。何とがな面白からんと案じ給ふ事、ゆめ／＼あるべからず。如何に沈思し給ふとも、よきはあるまじきなり

(『筑波問答』)

- (6) 初心の時は句をまうくる事、第一大切に候に、いかにも詞つゞき切れ／＼にて、てにはなど違ひ候とも、我は初心なれば、いかでか吉き事有るべきと、心を強く持ちてうち出だして

(『吾妻問答』)

あまりに案ずることなく、自然に詠むことを提唱している。「初一念」という、直感的発想を重んじている。それは、初心の頃は「如何に沈思し給ふとも、よきはあるまじき」からであり、「次第に詞をもみがき風情をもめぐらし侍るべき事」とする考えからきている。が、何よりも「初

心の時は句をまうくる事、第一」という、詠むことが大切であると考えているからであろう。連歌論書は概ね、やさしく説かれていく気味があるが、一考には値するであろう。「思ふところなく」「思ひ寄るところを、とかく案じ乱す事なく」詠むという態度は、『毎月抄』の「はたらかさで、御詠作」ということと、それほど遠い関係だとは思われない。

又、『正徹物語』では、「いかにも多く口軽にしもてゆけば、自然に上手にもなるなり」と言い、「初めから一首なりともよき歌を詠まんとすれば、一首二首も詠まれず、遂に詠みあがることもなきなり」と言う。更に、

- (7) かやうに歌はあまりめづらしき風情をもとめむとすれば、ほれ／＼となりて題の心をも忘れ、その難もおぼえぬ事にて侍り。ことに初心不堪の人は心うべき事なり

(『野守鏡』)

- (8) 初心の時、むねとよむべき姿を思ひわかし侍るが、ゆゑ、しき重事にて侍る也。達者のよめるをために引きて、おもしろき歌を好みよむこと、ゆめ／＼あるべからず

(『愚見抄』)

と記す。「よき歌を詠」もうとしたり、「めづらしき風情をもとめむと」したり、「おもしろき歌を好みよむこと」を

否定している。これらは、初心者に対することからくるのであろうが、「はたらかきで」の具体的内容を示しているとも考えられる。即ち、『毎月抄』の「はたらかきで、御詠作」とは、具体的には、よい歌や、珍しい風情や面白い歌を詠もうとする心を戒める言葉だとも考えられる。

二

以上の見解は、次に見るように必ずしも初心者に限ったことではない。その代表的なものをあげる。

- (1) 一番よりよろしからむと案ずれば、おそくなるにつけて心もさわぎて落題もする也

(『後鳥羽天皇御口伝』)

- (2) 凡そあまりに風情を求めてよめば、きときく人など、さりととも思はず

(『八雲御抄』)

- (3) 明匠どものおのづから思ひがけぬ事をよみたるは、みなさる事も有りとおぼえて見所侍り。それもわざとよめるにはあらず、風情のいたれるあまり、自然によりきたるなるべし。何をもてしとならば、わざととめたる風情は、いかにもことつくりたるやうに見えて、あるは心得がたく、あるは詞くだけておもしろからず

(『野守鏡』)

- (4) この体(有一節様)をばいたく好むべからざるべし。常にいともしもなき好士のこのみうらやむ歌様なり。必ず又捨てよとはあらず。時々まぜてよむべし。自然によまれむ時の事なり。態と求めよむべからずと承り置きし

(『三五記』)

- (5) 何事もいたりてよきといふは、すべて繕はでおのれなるを最上といふべし。論説を好み珍しき所を求むるは、至極の奥旨にいたらざる時の事也

(『連理秘抄』)

又、『三冊子』ではあるが、同様に「ある人の句は、艶をいはんとするに依つて、句艶にあらず。艶は艶をいふにあらず。また、ある人の句は、しをりなし。しをらんとするが故にしをりなし。ある人の句は、作に過ぎて心の直を失ふなり」と述べている。これらの例は、わざと求めることが繰り返し、否定されていると言える。安田章生氏が言われるごとく「わざと求めると、かえって失うものであり、意識して求めた跡が見えては、すぐれた芸術作品にはなりえないのである」からであろう。

しかし、習道上は、一見矛盾するようであるが、案じ求め、工夫することは必要であろう。このことについても、又、繰り返し語られている。

(6) 歌はたゞかまへてこゝろすがたよくよまんとこそす
べき事に侍れ (『古来風体抄』)

(7) 後悔者、心のどかに思をめぐらさずして、まだきに
よみて後になげきかなしむなり (『和歌色葉』)

(8) 「貫之は一首を十日二十日に読みける」といへり。
其もたとへばの事にや。貫之毎度に十日二十日によ
むにはあらじ。たゞそれも歌を案ずるがよきことをい
ふなり (『八雲御抄』)

(9) 老年にいたるまでもよく／＼心をつくして、あしき
すぢをばのぞきよむべきなり。歌は心をめぐらして案
じ出して、わが物としつべし (『詠歌一体』)

(10) 歌を読むには心を四方にはしらかして、やさしきふ
ぜいをもとめて、一所にとゞむる事なかれ。上下の句
にあまねくいひわたすべし。又歌をよまんには、面心
をしづかにすまして、思を四方へめぐらすべし

(『和歌大綱』)

厳しい修業の重要性はこうした言を待つまでもない。

『毎月抄』にも、「歌をばよく／＼詠吟して、こしらへて出
すべきなり」と記す。和歌の道を深く思い、構えて、心を
めぐらし案ずることなくしては、秀歌は生まれえない。これ
は、初心者も已達の者も同じである。「よく／＼思惟すべ

き事なり。但やすくよまれむを、すゞろに案すべきにはあ
らず」(『八雲御抄』)とも言い、『毎月抄』には「あまりに
又ふかく心をいれむとてねちすぐせば、入ほかの入くり歌
とて、堅固ならぬすがたの心得られぬは、心なきよりはう
たてくみぐるしき事にぞ侍る。このさかひがゆ、しき大事
にて侍る」と記す。心をめぐらし、案ずることは大事であ
るが、過度に案ずることはむしろ逆効果なのである。その
見極めが大事なのである。言わば、「風情をもとめて、風
情をもとめず」(『野守鏡』)という境地なのであろう。こ
れは、初心者には難解であるという論者の判断が、「わざ
と求めず」という言となつたのである。

このことが、初心者に限らず、繰り返し説かれるのは、
次のような秀歌に対する考え方も反映しているのであろう。

(11) 秀逸出で来ぬべからむ題をよく／＼案ずべし。さの
み心をくだく事も、其詮あるべからず。よき歌のいで
くることも自然の事なれば、 (『詠歌一体』)

(12) たゞよき歌のいで来る事は、自然の事なれば、百首
などに、かすかに沈思すること、ゆめ／＼あるべか
らず (『三三五記』)

(13) よき句といふは、我も知らずふと出でくるものなり。
かねてよき句せんとあてがはば、ふつとせらるまじき

と思ふべし

(『心敬僧都庭訓』)

秀歌は作歌のうちに自然と思ひもかけず詠まれるもの
ようである。それは、「至極のよき歌は、理の外なること
なり」(『正徹物語』)というように、理性を越えた境地か
ら生まれるのである。『毎月抄』においても、「詠吟事きは
まり、案性すみわたれる中より、今とかくもてあつかふ風
情にてはなくて、にはかにかたはらよりやす／＼として、
よみいだしたる中に、いかにも秀逸は侍るべし」と記され
ている。こうした、秀歌に対する玄妙不可説の境地は、作
歌の中で経験的に得られたものであろう。この秀歌の生ま
れる状況を思う時、作歌態度として、「わざと風情を求め
る」ことや「過度に案ずる」ことの否定は、初心者に限ら
ないことは自明なことと言える。

三

「はたらかさず」を、手崎政男氏は「はたらかさうとす
る一つの意思に対して、それを制止しようとする別の意思
がさらに加わって抑える関係にあることを意味する」と考
察された。そこで、その「はたらかさうとする一つの意
思」とは、具体的に何であるかを、歌論書などを参考にし
て、秀歌を詠もうとしてはやることや、面白く詠もうとし

て、わざと風情を求めたり、心をめぐらしたり、心をくだ
いたり、沈思したりという、心の動きのことではないかと
推測した。そこで、ここでは定家の『毎月抄』に見える、
「はたらかさうとする一つの意思」について考えることと
する。

- (1) さても此十体の中に、いづれも有心体にすぎて歌の
本意と存ずる姿は侍らず。きはめておもひえがたう候。
とざまかうざまにてはつや／＼つゞけらるべからず。
よく／＼心をすまして、その一境に入ふしてこそ稀に
もよまる、事は侍れ
- (2) 此道をたしなむ人は、かりそめにも執する心なくて、
なほざりによみすつる事侍るべからず
- (3) 相構へて、兼日も当座も、歌をばよく／＼詠吟して、
こしらへて出すべきなり
- (4) 常に心ある体の歌を心にかけてあそばし候べく候
か、る歌だにも、四五首十首よみ侍りぬれば、朦朧
も散じて、性機もうるはしくなりて、本体によまる、
ことにて候
- (6) 詠吟事きはまり、案性すみわたれる中より、今とか
くもてあつかふ風情にてはなくて、にはかにかたはら
よりやす／＼として、よみいだしたる中に、いかにも

秀逸は侍るべし……これをば、わざとよまむとすべからず。稽古だにも入り候へば、自然によみいださる、事にて候

(7) 詩は心をけだかくすます物にて候。……歌にはまづ心をよくすまはすは、一つの習にて侍るなり

これら、心を肯定的に捉えた用例では、歌道に執着し、心をすまし、境に入ること求めている。一方、心のあり様を否定的に捉えた用例は、

(8) あまりに又ふかく心をいれむとてねぢすぐせば、入ほがの入り歌とて、堅固ならぬ姿の心得られぬは、心なきよりはうたてくみぐるしき事にぞ侍る

(9) 朦気さして心底みだりがはしき折は、いかによまむと案ずれども、有心体出来ず。それをよまむくとしのぎ侍れば、いよく性骨もよわりて無正体事侍なり

(10) 初心の程はあながちに案すまじきにて候。さやうに歌は案すべき事とのみ思ひて、間断なく案じ候へば、性もほれ却りてしりぞく心のいでき候

「心をいれむとてねぢすぐす」とは、「あまりに深い歌境を展開させようとしてひねり過ぎる」ことである。「朦気さして心底みだりがはし」とは、「気が塞いで意識が散乱している」ことである。「性もほれ却りてしりぞく心」と

は、休みなく案することにより、「心がぼおとし、かえって厭気がさしてくる」ことである。これらは、秀歌を詠出する契機となる、心澄む状態ではないことを示している。それは、詠み疲れ、集中力の欠如や、「ねぢすぐす」という風情を求めるあまりの心の乱れによるものである。特に問題となるのは、心の乱れであるだろう。

それを解消するために、定家は「景気の歌」を「四五首十首よみ侍りぬれば、朦昧も散じて、性機もうるはしくなりて、本体によまる、ことにて候」と説明している。このことについて、尼ヶ崎彬氏は「まず詩的世界の雰囲気をもった歌をつくっていけば、次第に心は日常性を離れた働き方をするようになる。そうすれば追い求めて得られなかった \wedge 詠みつつある心 \vee は自然に実現するであろう、というのだ」と考察されている。

詠歌に心の働きは必要であるが、乱れた状態であつてはならない。詩的雰囲気の中に身を潜ませ、心の乱れを正すことが必要であると考えられる。定家によって否定された心の働きは、風情を求める横への動きである。肯定された心の働きは、深さへ向かう沈潜在への動きであると思われる。定家は心の働きそのものを否定したのではないのである。「もとの体をはたらかさで、御詠作あるべく候」とは、

意識して詠もうとし、案じたり、風情をめぐらしたりすることをしないで、「もとの体」を心すまし、自然に詠むことを薦めていると考えられる。「はたらかさで、御詠作」とは、「もとの姿を詠まないで、その他の姿を詠む」のではなく、「意識せず、風情をめぐらさないで、もとの姿を詠む」という意味だと思われる。

では、何故「いま一兩年ばかりも、もとの体を御詠作あべく候」と単純明快に言わなかったのであろうか。歌論書において、定着しているとも思えない「はたらかさで」をあえて記す必要性は何であつたのだろうか。初心者は、特に、上手な歌を詠もうと構えたり、わざと風情を求め、巧もうとすることに陥りがちなのを見て、定家は「いま一兩年ばかりも、せめてもとの体をはたらかさで、御詠作あべく候」と記したのであろう。更に、秀歌は「案性すみわたれる中より、今とかくもてあつかふ風情にてはなくてはかにかたはらよりやす／＼として、よみいだす」（『毎月抄』）ことより生まれることを踏まえて、あえて「はたらかさで」と明記したのであろうと思われる。

四

- (1) 花の歌を本として紅葉の歌にあらため、雪のうたを

とりては霰の歌に詠みなどしたるを見れば、題目はあらねども心詞すべて本にかはる所なし。たゞ花の歌を花に、月の歌を月に本歌をはたらかさずして、しかもその心をかへて其姿をめぐらしく詠まむと思ふべし

（『巖河上』）

- (2) 三体（骨、肉、皮のこと）をはたらかさずして、三体の中をよめらんをやよき歌とは申し侍らん

（『愚秘抄』）

- (3) 義体比と申すは月影をはたらかさずして氷といひ、花をおさへて雲といひたくらふれば、義体の比と申すべし。いかなれば、月影をおさへて氷といふといへば、水にうつれる月影のさえたる色、氷に似たる義あれば、義体比と申すべし。歌に云、

筏おろす清瀧川にすむ月はさをにさはらぬ氷なり
けり
（『三五記』）

- (4) 出し月かはなど云ふべきを、こはくも聞え隣もさしあはゞ、出し月かもなかゆるべし。はともとはひとつひびきのかななり。はたらかさでたすくるなり。故に助字とは名付るなり
（『悦目抄』）

- (5) 見るやうに隠れる所もなく、月とあらば山の秋風とも、花とあらば峯の霞とも、加様の物をちとも働かさ

で、景氣眺望を興ありて付くるも子細なし

(『連理秘抄』)

これらは、管見に及んだ歌論書、連歌論書における「はたらかさず」の用例である。(1)は偽書である『悦目抄』では、「月の歌を月に、歌をはたらかさずして、しかも其心をかへて珍しくよまむと思ふべし」と記されている。『簸河上』の「本歌をはたらかさず」に対して、『悦目抄』は「歌をはたらかさず」という違いがある。(1)の「月の歌を月に本歌をはたらかさずして、しかもその心をかへて」とは、『毎月抄』に記す、「達者のわざ」とされた「月の歌をやがて月にてよむ」と同じである。この「はたらかさず」は「そのまま変えない」という意として解されるが、「本歌から触発される心を抑えて本歌の詞のままに」という意味だと思われる。『悦目抄』の用法は、『簸河上』を引用しつつ、「はたらかさず」の意味を『毎月抄』にならい、「歌をはたらかさずしてよまむ」と言い換えたものと思われる。

(2)について、手崎政男氏は前掲書(二六五頁)において、『毎月抄』の『もとの体をはたらかさず』に類する表現であるが、詠歌に際して、「三体」のどれかをということを意思する心をいったん抑え、むしろ「三体」ということを意思の外に置くことによって、かえって、「三体」を兼ね

た詠歌の実現が期されることを言うものである。『毎月抄』の「はたらかさず」が、みずからの意思をさらにみずからの意思で抑える意味であることはや明白であろう」と考察されている。確かに、『毎月抄』の言い回しを踏襲した表現である。しかし、「三体をはたらかさずして、三体の中をよめらん」であるだけに、微妙ではあるが『毎月抄』の用法とは違いがあると思われる。「三体の中をよむ」とは、『愚秘抄』で以下に続く「十体の何れとも見えざらん歌の、しかも皆体ごとに満足したらむをよき歌とは申すべし」を思えば、「(三体のいずれとも見えないが)三体を兼ねている歌の意だと思われる。ここでの「はたらかさず」は、詠もうと意識しない、心をめぐらさないという意味とは思われない。「三体をはたらかさずして」とは、「三体はたらかず」の使役表現である。即ち、三体としての意味機能が働いていないという表現の使役表現として、三体としての意味を機能させないで、抑えてという意味であり、意識的過ぎるかもしれないが、三体のいずれとも見えない、三体を詠まないという意味だと考えたい。

(3)の用例は「月影をはたらかさずして氷といひ」と「月影をおさへて氷といへば」の同文を考慮すれば、「はたらかさず」は「おさえる」と言い換えられる。「おさえる」

とは、働^{はたら}き、機能、意味、表現などを抑えるということだと思われる。「月影をはたらかさずして」とは、月影の表現を抑えてという意味であり、具体的には、月影に直接関する表現をしないという意味だと思われる。意味や働きを抑えるという点で(2)の用例と同じ用法であると考えられる。

(4)の用例は、「出し月かは」は「出し月かも」と言い換えることが出来ることを記している。それは、「は」ともとはひとつひびきのかなであることを根拠にしているようである。「は」が「も」と通じることが「はたらかさでたすくる」と説明している。「も」の本来の意味を機能させないで、「は」の意味をもたせているという意味だと思われる。この用例も意味や働きを抑えるという点で、(2)や(3)と同じ用法であると思われる。

(5)の用例は、「月」という前句に対しては、「山の秋風」と付け、「花」という前句に対しては、「峯の霞」と付けることを述べている。これは「ちとも働かさで、付くる」とであるとして説明している。「加様の物をちとも働かさで」を『日本古典文学大系 連歌論集 俳論集』の頭註は、「このような素材を少しも作意をこらさず、そのまま用いて⁽¹⁾」と記している。この「はたらかさず」の用法は、風情

を求め、心をめぐらさないでという『毎月抄』の用法と同じものであると考えられる。

『為兼卿和歌抄』には次のような例がある。

花にても月にても、夜のあけ日のくる、けしきにても⁽²⁾う事にむきてはその事になりかへり、そのまこと⁽³⁾をあはらし、其ありさまをおもひとめ、それにむきてわがこゝろのはたらくやうをも、心にふかくあづけて、

「こゝろのはたらくやう」とは、詠もうとして自づと動く心の働きを指していると思われる。とすると、「はたらかせる」とは、うち動く心の働きを意識的に仕向けることであろう。即ち、「はたらかさず」とは、こうしたうち動く心の働きを意識的に抑えることを意味していると考えられる。(1) (5)の用例を見ると、「はたらき」は何の「はたらき」であるかによって、「意味、表現」と「詠もうとする心」とに分けられる。それは、「意味、表現」を抑えるという場合、実質的には、意味しないことであり、表現しないことである。次に、「詠もうとする心」を抑えるという場合は、心の働きを抑えて歌を詠むということである。「はたらかさず」には、こうした用法上の違いがあると思われる。(1)から(5)の用例を見ると、前者は

(2)の「三体としての表現を抑えて、即ち詠まないが（三
体いづれでもある）」

(3)の「月影の表現を抑えて、即ち、詠まないで、（氷の
ことを詠む）」

(4)の「『も』は『も』を意味しないで、『は』の意味とな
る」

後者は、

(1)の「うち動く心を抑えて（歌を詠む）」

(5)の「うち動く心を抑えて（『月』には、『山の秋風』と
付ける）」

となる。『毎月抄』の用例は後者であり、うち動く心を抑
えて、「もとの姿」を詠むことを教えていると考えられる。

五

「もとの姿」は初心者が第一に詠む風体であり、それは
「心はたらかさで」、即ち、「もとの姿」を詠もうと意識し
たり、わざと風情を求め、心をめぐらしたりしないで詠ま
なければならぬものであることを定家は主張している。

ところで、「もとの姿」四体の内の「有心体」は『毎月抄』
において、次のように説明されている。

さても此十体の中に、いづれも有心体にすぎて歌の本

意と存ずる姿は待らず。きはめておもひえがたう候。
とぎまかうぎまにてはつや／＼つゞけらるべからず。
よく／＼心をすまして、その一境に入ふしてこそ稀に
もよまる、事は侍れ

「有心体」は「一境に入ふしてこそ稀にもよまる、」よ
うな、極めて会得しにくい体なのである。又、「もとの姿」
の内の「幽玄様」も『毎月抄』には、直接的な言及はない
が、「此体ヲ心ウル事ハ、骨法アル人ノサカヒニイタリ、
タウゲヲコエテノチアルベキ事也」（『長明無名抄』）とあ
り、同じく会得し難い体と当時認識されていたように思わ
れる。「もとの姿」は、和歌の習道上、第一段階にありな
がら、極めて「おもひえがた」い歌であるとは、どう理解
すれば良いのだろうか。手崎政男氏は前掲書（二六七頁）
において、「もとの姿」は「究竟の到達境を意味し、練磨
のはてにはじめて達成されるもの……『もとの姿（体）』が
初心段階のものであり得ない」と考えられたが、細谷直樹
氏は、「定家の脳裡では、有心体は歌の必須条件と本質的
条件とを兼ね備える二面的性格を持つ歌体として捉えられ
ており、必須条件の面から『すなほにやさしき姿』である
点に特徴を持つ基本的歌体に属して、習道段階の第一段階
に位置づけられ、本質的条件の面から『きはめて思ひ得が

たく、稀にも詠まるる『至難な体と高められたのだと考えることも可能である』と考察されてる。

習道論として、心敬は「仏法をも歌道をも、心の至らぬ輩には、たゞ其の人の心の至るまゝに示せともいへり」(『さゝめごと』と、その人の現在の能力に応じた歌を詠むことを説いている。この言は必ずしも初心者に対してのものとは限定出来ないが、未だしき初心者は、その実力に見合う歌を詠むことを薦めていると読むことは出来ると思う。この考え方は、次に記すように、他の書においても示されている。

(1) さればとて、この上手の体をよまむとすべからず。

学ばゞ人毎によみ損じ侍るべし。自然とけいこしてもてゆけばおぼえずしてよまるゝなり (『桐火桶』)

(2) 唯所詮歌の本意は、上手にならむと思はゞ初心の程は我分際の風情心をよみもて行くべき也。努々先いまだたるかたを好むべからず (『愚秘抄』)

(3) 秀逸、拔群のやうの姿をば、初心のほどよむべからず。……練磨の後自然に秀逸の体はよまるゝなるべし

(『三五記』)

(4) 歌はいかにとあるべきものぞと尋ね侍りしかば、唯心のおよぶ所に叶はんとすべしとのたまひしは、げに

も不堪の者の上手の様をうらやみ、秀逸の姿を心にかくれば、道とほくなりてよみいたることなかるべし。

さればわづかに存じ得たらんしるべにまかせて、ことの道理をわきまへよむべし。かくしつゝまなびもてゆかば、自然に発明する事もなかなからん

(『愚見抄』)

これらは偽書ではあるが、初心者は上手な歌人の歌を羨まないで、分に応じた歌を読み、読みつのうちに、自然と上手な歌を詠むことが出来ると思われている。これらの考え方は、常識的で正統な習道論と言える。一方、「初心の程は如何にも師匠を学ぶべきにや。……されども、心ざしをば高くつかふべきにや」(『十問最秘抄』)と、初心の時でも、志は高くもつことが大切であると説いている。同様な考え方を示している論として、初心者に対してだけではないが、次のような論を見ることが出来る。

(5) 先歌をよまん時は思ふべし、人丸、赤人も、大綱の引括三曲心より出給ひぬれば、我等とてもしかなれば、劣り奉るべからずと、高き心をつかふべし。聊も卑下しつれば、せられぬ道也 (『悦目抄』)

(6) たゞ、上手の常に用ゐて幽玄ならん言葉を、耳の底にとゞめて、能々思案すべし。 (『連理秘抄』)

(7) 初心の人、こは賦物は連歌損ずる事にて侍る。……

先ず秀逸の体を至極稽古して、賦物の沙汰はあるべき

事なり

(『筑波問答』)

(8) いかにも道が高くおもひ幽玄をむねとして執心の人、

この道の最用なるべしとなり

(『さ、めごと』)

(9) 心を高く詞を艶に、一風にとまる心を嫌ひ侍るべ

くや

(『所々返答』)

これらは、志を高く掲げ、詠むことを薦めている。段階を踏んで進んで行くという習道論とは、逆の考え方である。

「心ざしをば高くつかふ」に関して、『詩人玉屑』の「夫学詩者、以識為主。入門須正。立志須高」の影響があることが指摘されている¹³。こうした考えの根底には、「上手に初

めよりそひて、心言葉を学び給ふべし。下手にそひて悪き心の執著しぬれば、すべて直りがたき事なり」(『筑波問答』)の下手に染まってしまうことの危険性への認識や、

「一切の芸はよき師匠にあひて学ぶにむなしからずといへり。其心といふは、上たる事をならひて必ず中たる事を得といへり」(『悦目抄』)の目標を掲げて習っても目標には至らないのが常であるから、目標は高くもつべきだという認識があるように思われる。芸道論においては、高い理想を掲げそれに向かって励むという考え方の存在が知られる

のである。

『毎月抄』の「もとの姿」も、学びやすい程度のやさしい歌だからというのではなく、むしろ、歌の理想ともいべき本質的な姿だからこそ、最初に学ぶべきであるという考えだと思われる。「とざまかふざまにてはつや／＼つゞけらるべからず」という「有心体」を練磨の後ではなく、初心の時から詠むべきと説く点に、定家の段階を追っての修業ではなく、直ちに本道を、理想を学び目標に到達するという和歌習道観が見られる。「もとの姿」の基本的意味は、まず第一に学ぶという必須的要素としての初心性であり、理想的歌体としての究竟性でもあるということである。こうしたことを矛盾なく意味する点に「もとの姿」の意義があると思われる。

註

(1) 『日本古典文学大系 歌論集 能楽論集』(岩波書店 昭和三六年刊) 補注一(二五七頁)。

(2) 手崎政男氏著『有心と幽玄』(笠間書院 昭和六〇年刊) 二六八頁。

(3) 久松潜一氏は「やめないで」(『日本古典文学大系 歌論集 能楽論集』岩波書店 昭和三六年刊、一二七頁)、久保田淳氏は「動かさないで。変えないで」(『中世の文学

歌論集一』三弥井書店 昭和四十六年刊、三一八頁）と注しておられる。

- (4) 石黒吉次郎氏は『中世芸道論の思想——兼好・世阿弥・心敬——』（国書刊行会 平成五年刊）において、「①初心者は『万葉集』などまだ詠んではならない歌風がある。（毎月抄・愚見抄・三五記）②初心者は上手な者の技法を真似てはならない。（毎月抄・愚見抄・愚秘抄）③初心者は考え過ぎ、さらさらと歌を詠んでゆくべきである。（毎月抄・愚秘抄）④初心者には詠むにふさわしい歌の姿がある。（愚見抄・三五記）⑤初心者には正しい道の学び方をしなければならぬ（愚見抄）⑥初心時の幽玄を忘れてはならない（桐火桶）」（七九頁）と考察されている。

- (5) 安田章生氏著『日本の芸術論』（東京創元社 昭和四十七年刊）八九頁。

- (6) 『日本古典文学全集 歌論集』（小学館 昭和五〇年刊）五一五頁。

- (7) 註(6)に同じ。五一六頁。但し、『日本古典文学大系 歌論集、能楽論集』の注では、「朦朧」について「人に負けることをきらう気性」（二二九頁）と記されている。

- (8) 註(6)に同じ。五二八頁。

- (9) 尼ヶ崎彬氏著『花鳥の使』（勁草書房 昭和五八年刊）一五六頁。

- (10) 『日本歌学大系 第四卷』解題の「俊頼髓脳、八雲御抄、十訓抄、簸河上、和歌大綱の影響を受けてゐることは明確

であり」（三三頁）に依る。

- (11) 『日本古典文学大系 連歌論集 俳論集』（岩波書店 昭和三十六年刊）四九頁。

- (12) 細谷直樹氏著『中世歌論の研究』（笠間書院 昭和五一年刊）一〇二頁。

- (13) 註(11)に同じ。二五五頁。

- (14) 藤平春男氏は『歌論の研究』（ベリかん社 昭和六三年刊）において、「『秀逸体』は十体のどれとも直接の關係を持たないのであるが、基礎様式『もとの姿』の四体は、それぞれ『秀逸体』のなかに吸収されているあとを認めることができるようである」（二四〇頁）と考察されている。

〔付記〕

テキストとして、歌論書は『日本歌学大系』、連歌論書、俳論書は『日本古典文学大系 連歌論集 俳論集』を用いた。尚、十体から四体が「もとの姿」として、取り上げられた理由は「もとの姿」は「歌の統一理念として、十体のすべてに渡るといふ性格を有している」（拙稿「定家の十体観ともの姿」、『日本文芸研究』第三十四卷第二号）からと考える。